ご購入の案内

黒塚古墳の研究

奈良県立橿原考古学研究所 編

B4 判・上製・函入・584 頁（予定）
本体予価 32,000 円＋税
ISBN978-4-8406-2226-4〔2018 年 9 月刊行予定〕

目　次

第Ⅰ部　調査編
第 1 章　調査の経緯
第 2 章　位置と環境
第 3 章　墳丘
第 4 章　埋葬施設
第 5 章　副葬品の配置
第 6 章　副葬品
第 7 章　墳丘出土遺物

第Ⅱ部　研究編
第 1 章　考古学的研究
第 2 章　文化財科学的研究

第Ⅲ部　総括編
第 1 章　墳丘・埋葬施設
第 2 章　副葬品
第 3 章　黒塚古墳の考古学的意義

図版（オールカラー 152 頁）

本書の特長

①初期ヤマト王権の人物が眠る大和古墳群で唯一未盗掘　卑弥呼の墓ともいわれる箸墓古墳、全長約 300 m を誇る渋谷向山古墳（伝景行天皇陵）など、初期ヤマト王権の中枢を担った人物が埋葬される奈良県の**大和古墳群**は、ほとんどが盗掘されていたり、陵墓指定のため発掘できない古墳ばかりである。そのなかでも古墳時代前期前葉（3 世紀後半）の黒塚古墳は、地震による崩落で**大規模な盗掘を免れたため、当時の埋葬状況が復元可能な唯一の調査例として大変貴重**。

②30 面を超える卑弥呼時代の鏡の出土状況が判明した唯一の調査例　卑弥呼の鏡ともいわれる**三角縁神獣鏡 33 面の出土量は国内最多**。画文帯神獣鏡 1 面ふくめ、大量の鏡が埋葬当時のまま出土。ここから副葬方法、埋葬位置のルール等、当時の人々の考え方を復元する重要なデータが得られる。

③さまざまな分野による総合研究の成果　三次元計測を導入し、計測画像、笵キズ、詳細な写真、考古学的分析、自然科学分析などによる**多面的な調査結果**を収録。

④武力と権力の象徴――鉄製武具の出土量が最大　鉄製武器も豊富で、鉄鏃出土量も古墳時代前期で最大の出土量。ともに**ヤマト王権中枢の人物の墓にふさわしい質と量**を誇る。当時、鉄は輸入品と考えられ、単純な武力だけでなく、権力の象徴でもあった。他に中国製とみられる小札甲（小札出土量も日本最大）、旗のような正体不明な U 字形鉄製品などもあり、**中国大陸との直接的な交渉の証拠**となる。

⑤日本国内に無数に広がる古墳の出現期を意味づける発見　黒塚古墳は古墳時代前期前葉（3 世紀後半）にあたり、古墳時代の幕開けであるヤマト王権との関係や、全国に広がる多数の古墳を意味付けるのに不可欠な古墳。

⑥古墳・鏡・鋳造技術の研究者必見　古墳時代の幕開けで最大量かつ未盗掘という貴重な情報を提供。本書は古墳研究はもとより、鏡の研究、鋳造技術を研究する人にとって必見の書となる。

⑦迫力の大型本　B4 判（364 × 257㎜）の大判を採用。500 点をこえる図版・写真等、カラー写真を多数含む圧倒的な情報量で全貌に迫る。

【予約受付中】 刊行次第、お届けいたします。ご注文は下記にご記入の上、最寄りの書店か、または小社までお申し込み下さい。

申込書	奈良県立橿原考古学研究所編／八木書店刊　2018 年 9 月刊行予定 黒塚古墳の研究　〔　　〕冊 ISBN978-4-8406-2226-4 C3021 ¥32000E　定価（本体予価 32,000 円＋税）		取扱店（番線印）
	お名前（ふりがな）	TEL	
		FAX	
	ご住所　〒	E-MAIL	

PP 201806 11000

古墳研究はこの発掘調査報告書から始まる！

黒塚古墳の研究

奈良県立橿原考古学研究所 編

2018 年 9 月刊行予定　定価（本体予価 32,000 円＋税）
B4 判・上製・函入・584 頁（予定、カラー約 250 頁）
ISBN978-4-8406-2226-4 C3021 ¥32000E

初期ヤマト王権はどのように形成されたのか
その謎を解く未盗掘の前方後円墳を徹底検証

卑弥呼の鏡ともいわれる三角縁神獣鏡等 34 面、大量の鉄製武具等の埋葬品や、竪穴式石室・木棺等、地震による崩落で盗掘を免れた当時の埋葬状況を、大判のカラー写真と図版で検証

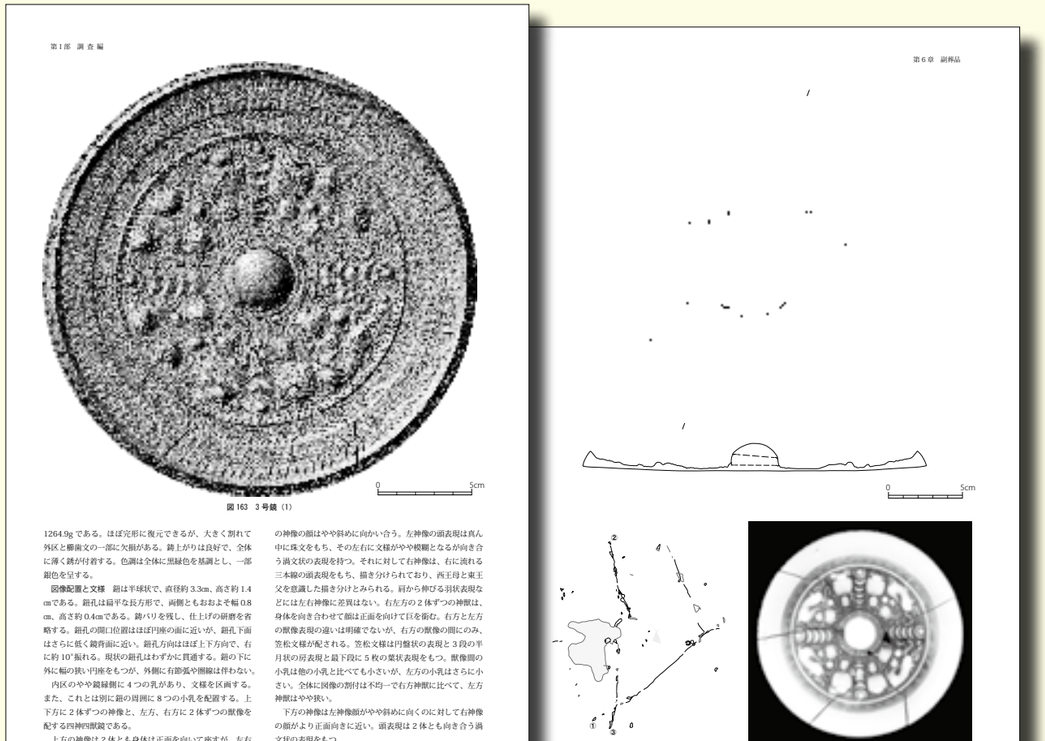
組見本（B4 判原寸・部分）

PL. 31　副葬品（三角縁神獣鏡）

多彩な図版（組見本・縮小）

大量の朱で塗られた石室や、膨大に出土する鏡・武具などの副葬品の数々をカラー写真で紹介。

出土した 34 面の鏡には、①三次元形状計測画像（下左）、②計測図（下右）を併記。③別図に笵傷と鋳造時の欠陥等の観察所見を掲載し、情報を補足するために④X 線写真を併記。



1264.9g である。ほぼ完形に復元できるが、大きく割れて外区と櫛歯文の一部に欠損がある。鋳上がりは良好で、全体に薄く銹が付着する。色調は全体に黒緑色を基調とし、一部銀色を呈する。

図像配置と文様　鏡は平縁状で、直径約 3.3cm、高さ約 1.4cm である。鏡孔は扁平な長方形で、両側ともおおよそ幅 0.8cm、高さ約 0.4cm である。鏡ぐりを残し、仕上げの研磨を省略する。鏡孔の開口位置はほぼ円座の端に近いが、鏡孔下面はさらに鏡背面に近い。鏡孔方向はほぼ上下方向で、右に約 10° 振れる。現状の鏡孔はわずかに貫通する。鏡の下に外に幅の狭い円座をもつが、外側に有節弧や圏線は伴わない。

内区のやや鏡縁側に 4 つの乳があり、文様を区画する。また、これとは別に鏡の周囲に 8 つの小乳を配置する。上下方に 2 体ずつの神像と、左方、右方に 2 体ずつの獣像を配する四神四獣鏡である。

上下の神像は 2 体とも身体は正面を向いて座すが、左右の神像の顔はやや斜めに向かい合う。左神像の頭表現は真ん中に珠文をもち、その左右に文様がやや模糊となるが向き合う渦文状の表現を持つ。それに対して右神像は、右に流れる三本線の頭表現をもち、描き分けられており、西王母と東王父を意識した描き分けとみられる。肘から伸びる羽状表現などには左右神像に差異はない。右方左の 2 体ずつの神獣は、身体を向き合わせて顔は正面を向けて口を銜む。右方と左方の獣像表現の違いは明確でないが、右方の獣像の周にのみ、笠松文様が配される。笠松文様は円盤状の表現と 3 段の半月状の房表現と最下段に 5 枚の繁状表現をもつ。獣像間の小乳は他の小乳と比べても小さいが、左方の小乳はさらに小さい。全体に図像の割付は不均一で右方神獣に比べて、左方神獣はやや狭い。

下方の神像は左神像がやや斜めに向くのに対して右神像の顔がより正面向きに近い。頭表現は 2 体とも向き合う渦文状の表現をもつ。